

宮本亜門構成・演出 「マダムバタフライX」構想は？

21世紀。オペラ「蝶々夫人」の撮影を控え、スタッフたちが議論している。
日本を一度も訪れたことのなかったプッチーニの生んだヒロイン
「世界一有名な日本女性」蝶々さんの余りにまっすぐな生き方、
あまりに美しいプッチーニの音楽。

このオペラが傑作であればあるほど、世界的にも様々な議論がある。

…このオペラは現代の観客にとって、どんな意味を持つのか？

はたして蝶々さんは生身の女性なのだろうか？

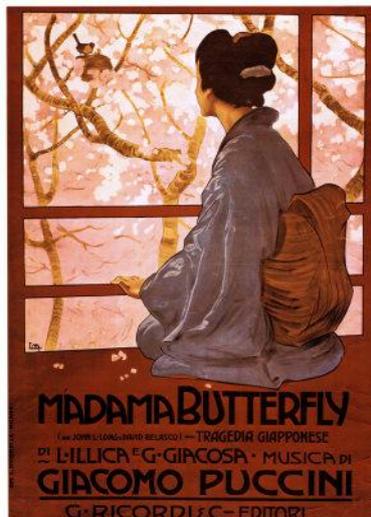
様々な視点と思いが交錯する中、舞台が動き出す…

プッチーニ作曲「蝶々夫人」あらすじ

明治中期の長崎。港を見渡せる家で、アメリカ海軍士官のピンカートンは、結婚仲介人ゴローの斡旋で、没落士族の出の15歳の芸者、蝶々さんと結婚する。

ところが、ピンカートンは長崎での任務が終わり、「駒鳥が巣を作る頃に」と言い残しアメリカへ帰国。駐長崎領事のシャープレスは、ピンカートンが本国で別の女性ケイトと結婚したことを手紙で知るが、真実を話せぬまま蝶々さんを見守る。蝶々さんは、ピンカートンが去った後に生まれた金髪で青い目の息子、忠実な侍女スズキと共に、夫を信じて待ちつづける。

そんな折、ピンカートンの船が入港したことを告げる大砲の音が響く。
蝶々さんは部屋いっぱいに花びらを撒いて夫の帰りを待つ。翌朝、ピンカートンはケイトを連れて蝶々さんを訪れる。ようやく真実を知った蝶々さんは、ケイトに息子を引き渡すことを承諾。部屋にいた息子に見えないところで自ら喉を突き、駆けつけたピンカートンの声を聞きながら息絶えていくのだった。



スカラ座初演時のポスター